

行使意図を明確にしたコーピング尺度の 開発と妥当性の検討¹

高本 真寛 筑波大学 相川 充 東京学芸大学

Development of the Coping Scale for Interpersonal Stress Events related to the goals of the coping

Masahiro Takamoto (*University of Tsukuba*) and **Atsushi Aikawa** (*Tokyo Gakugei University*)

This study developed the Coping Scale for Interpersonal Stress Events, and evaluated its validity. This scale is composed of the following subscales based on the goals of the coping: problem-focused coping, emotion-focused behavioral coping, and emotion-focused cognitive coping. Based on previous research, a pilot study was used to construct scale items, considering the goals of coping to reduce measurement error. In Study 1 ($N = 348$), the validity of the scale was examined using several statistical analyses. Study 2 ($N = 182$) and Study 3 ($N = 161$) report correlations between the Coping Scale for Interpersonal Stress Events and several theoretically relevant scales. Based on these results, it was concluded that the scale and subscales are valid for measuring interpersonal stress coping.

Key words: goals of coping, scale, validity, interpersonal stress events.

The Japanese Journal of Psychology
2012, Vol. 83, No. 2, pp. 108-116

コーピング尺度はこれまで国内外で数多く開発されてきた (Carver, Scheier, & Weintraub, 1989; 神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995; 加藤, 2000; 小杉, 2000; 大塚, 2008)。しかし、コーピングの行使意図は個人間で、あるいは文脈において異なるために、経験的分類は困難であると指摘されている (Latack & Havlovic, 1992; 島津, 2002)。例えば、学業ストレス場面において“試験勉強をする”というコーピングは、個人や文脈によって問題焦点型対処 (目標成績のために試験勉強をする)、情動焦点型対処 (試験への不安を低減させるために試験勉強をする) どちらでも行使可能である。つまり尺度で一つのコーピングが提示されていても、その意図が異なる (または混在している) 可能性があり、因子分析等の経験的分類を行っても再現性が損なわれて結果の一貫性が保てないのである。また、先行理論やモデルに基づく理論的アプローチによって分類しても (大塚, 2008)、コーピング

意図が明確にされない限り、同様の問題を抱えることになる。

このため、個人間または文脈におけるコーピング意図を明確にせずに測定していた既存の尺度は、尺度得点が構成概念外の分散 (construct irrelevant variance) に汚染されて、妥当性が減じていたおそれがある。また、汚染の程度は個人間または文脈によって異なるため、従来の尺度では、個人や状況の間での比較結果の妥当性は低く、研究間の知見の比較が困難である。

コーピングの効果に関する研究では、すでにコーピング意図を重視する必要性が指摘されている (Carver et al., 1989; 村山・及川, 2005)。尺度に関する研究でも、コーピング意図を考慮する必要がある。そこで本研究は、行使意図を明確にしたコーピング尺度の作成を目的とした。

コーピング意図を明確にした尺度を作成する方法には、尺度項目ごとに行使意図を表現する方法 (以下“項目表現による明確化”とする) と、尺度の教示文に行使意図を提示する方法 (以下“教示文による明確化”とする) がある。“項目表現による明確化”を採用した場合、項目が冗長になり、ダブル・バーレルが生じるリスクが高まる。また、項目内に行使意図が記述されるため、行使意図が共通である項目同士での類似性が高まり、反応バイアスが生じるリスクも高ま

Correspondence concerning this article should be sent to: Masahiro Takamoto, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tennodai, Tsukuba 305-8572, Japan (e-mail: m091103k@yahoo.co.jp)

¹ 本論文は平成 23 年に東京学芸大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部をまとめ直したものである。本研究の一部は日本心理学会第 75 回大会において報告されている。

る。その結果、新たな構成概念外の分散の汚染が生じてしまう。これに対して“教示文による明確化”は、項目の冗長性が抑えられ、ダブル・バーレルが生じるリスクは低い。また、項目表現の類似性による反応バイアスも生じず、構成概念外の分散の汚染が抑えられる。そこで本研究では、“教示文による明確化”を採用する。

従来のコーピング測定に関する研究では、コーピングの状況的一貫性は否定されているため（島津・小杉, 1998; 庄司・庄司, 1992）、尺度作成にあたり、ストレス者を特定する必要がある。本研究では、大学生にとって身近なストレス者であり、発達課題に直面する際には不可避である（Seiffge-Krenke & Shulman, 1993）対人ストレスイベントに限定した尺度作りを行う。つまり本研究で扱うコーピングは、対人ストレス・コーピングとなる。本研究では、従来の研究（Lazarus & Folkman, 1984 本明・春木・織田監訳 1991; Aldwin, 2007）を参考に、対人ストレス・コーピングを“対人ストレスイベントの解決および対人ストレスイベントによって喚起されたネガティブな情動反応の低減を目的とする意識的な認知的・行動的努力”と定義する。

対人ストレス・コーピングの下位概念は、Latack & Havlovic (1992) を参考に“焦点（問題-情動）”と“方法（行動-認知）”による分類基準を用いる。本研究では、“教示文による明確化”を採用するため、問題焦点型、情動焦点型それぞれに異なる教示文を用意する。さらに情動焦点型では、“方法（行動-認知）”ごとに異なる教示文を用意する。一方、問題焦点型については、“方法（行動-認知）”の違いによって教示文と項目内容の関係に齟齬が生じないため、同一教示文を用いる。従って本研究での対人ストレス・コーピング尺度は、問題焦点型対処尺度、情動焦点型行動的対処尺度、情動焦点型認知的対処尺度の3下位尺度で構成される尺度であり、対人ストレス・コーピングを包括的に測定する尺度となる。しかも本研究では、行使意図を明確にした教示文を提示するため、従来の尺度よりも妥当性の高い尺度を作成することができると考えられる。

本研究において、尺度の妥当性の捉え方は Messick (1989 池田訳 1992; 1995)、平井 (2006) に従うものとし、その中でも“内容的側面からの証拠”“構造的側面からの証拠”“一般化可能性の側面からの証拠”“外的側面からの証拠”の4側面から検討する²。

² 妥当性の検討は集団実施法を予定しており、“本質的側面からの証拠”と“結果的側面からの証拠”に関する検討は質問紙調査の構成上、検討が困難であると判断し、今回の検討に含めない。

予 備 研 究

方 法

項目の収集 包括的にコーピングを測定する九つの既存尺度を選択し、各尺度項目から 265 項目を項目プールとした（神村他, 1995; 神田・大木, 1998; 加藤, 2000; 木島, 2008; 小杉, 2000; Lazarus & Folkman, 1984 本明他監訳 1991; 大塚, 2008; 尾関, 1990, 1993）。

尺度の作成過程 項目プールの項目を3下位概念（問題焦点型対処、情動焦点型行動的対処、情動焦点型認知的対処）で分類し、項目表現の統一を図った（ステップ1）。ステップ2として、コーピング研究の経験をもつ大学院生2名が本研究におけるコーピングの定義を把握した上で、構成概念の代表性、項目内容の構成概念の反映の程度を検討した。別の大学院生4名が項目間の内容の抽象度と具体性、項目の表現の適切性に関する検討も行った（ステップ3）。これらのステップにより修正した項目内容の抽象度、具体性に関する検討を別の大学院生2名が行った（ステップ4）。ステップ5は、下位概念の弁別性の検討を目的として、ステップ1—4とは別の大学院生2名が3下位概念の定義を把握した上で、作成項目の一覧を見ながら各定義に該当する下位概念に分類した。これらのステップにおいて、複数のステップを重複して担当した大学院生はいない。最終的な項目内容は社会心理学を専門とする大学教員1名がチェックした。

結果と考察

ステップ1で既存の尺度項目を対象に、(a)コーピングの概念に該当すること、(b)対人ストレス領域で適切な項目内容であること、(c)ダブル・バーレルがないこと、という観点に基づいて項目の検討を行った。その結果残った 222 項目を3下位概念に分類した。問題焦点型対処に 63 項目、情動焦点型行動的対処に 63 項目、情動焦点型認知的対処に 81 項目が分類され、15 項目がいずれの下位概念にも分類できなかった。分類後、同じ内容を表す項目は、内容と表現を考慮した上で1項目に統一した。その結果、問題焦点型対処が 16 項目、情動焦点型行動的対処が 14 項目、情動焦点型認知的対処が 15 項目となった。その後、ステップ2からステップ4までで項目内容の検討を重ねて、3下位尺度各 16 項目ずつの構成となった³。ステップ5

³ ステップ3において、情動焦点型対処のコーピングに関して、検討者から項目一覧にないコーピングが三つ提案された。これらの項目に関して、尺度に含めることの同意が他の検討者から得られたこと、またステップ4で追加項目に関する説明を行ったところ、検討者の同意が得られたことから項目として採用した。

の結果、想定した 3 下位概念に全体の 83.3% が分類でき、 κ 係数は $\kappa = .79$ であった。

上記ステップ 1—5 までの過程を経て項目作成を行うことで、作成プロセスにおける客観性と透明性が確保されたため、本尺度は妥当性のうち“内容的側面からの証拠”が保証されたと考えられる。

研究 1

目的

尺度の妥当性に関する評価のうち、“構造的側面からの証拠”に関する検討を行う。

方法

調査対象者と実施方法 2010 年 6 月初旬から中旬にかけて東京都内の A 大学に在学する大学生 381 名を対象に講義時間内に実施し、342 名（男性 116 名、女性 223 名、不明 3 名； $M = 19.96$ 歳、 $SD = 1.30$ ；有効回答率 91.34%）から有効回答を得た⁴。部分的に欠損のあるデータ（欠損が全体の 1 割未満：12 名）は完全にランダムな欠損であるとみなして平均値を用いた欠損値代入を行った。

質問紙の構成 1. フェイスシートには、学年・年齢・性別・ID 番号⁵の記入欄を設けた。

2. 高比良（1998）によって作成された対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）短縮版から対人領域ライフイベント尺度 15 項目を使用した。

3. コーピング尺度は、問題焦点型対処尺度、情動焦点型行動的対処尺度、情動焦点型認知的対処尺度の 3 下位尺度各 16 項目で構成される尺度であり、それぞれ異なる教示文を提示した。“1 ページで経験したと回答したような出来事を経験した時、あなたはいつも”までは共通だが、問題焦点型対処尺度は“問題を解決するためにどのような行動をとっていましたか。”、情動焦点型行動的対処尺度は“気を紛らわせるためにどのような行動をとっていましたか⁶。”、情動焦点型認知的対処尺度は“あなたはいつもどのように考えるようにしていましたか。”と尋ねた。このあと

⁴ 倫理的配慮として、個人が特定されることはないこと、また、ストレスイベントへの回答を求めるため、少なからず侵襲性のある調査となりうることから、回答を拒否しても、途中で回答を止めてもよいこと等を明記し、口頭で説明した。その後の研究 2、3 でも同様の内容・方法で倫理的配慮を行った。

⁵ 追跡調査を行い、個人データを照合するための番号（氏名の頭文字のアルファベットと生年月日で作成）であるが、本研究では扱わない。

⁶ 情動焦点型行動的対処を行使する際に対象となる情動はネガティブな情動であり、代表的な情動に不安、怒り、哀しみなどが挙げられる。これらのネガティブな情動への対処を一般的な表現で教示するために、“気を紛らわせる”を用いたが、この用語の選択による内容的齟齬は見られないと考えられる。

Table 1
問題焦点型対処尺度の EFA 結果
(最小 2 乗法, promax 回転)

| 質問項目 | 因子 | |
|--------------------------|------|------|
| | 1 | 2 |
| 積極的行動 ($\alpha = .82$) | | |
| 1 相手と積極的に話をするようにした | .82 | -.20 |
| 3 相手のことをよく知ろうとした | .66 | .05 |
| 15 やらなければならないことを考えた | .57 | .09 |
| 8 状況を変えようと努力した | .56 | .15 |
| 2 自分から謝った | .56 | -.07 |
| 16 問題を解決するための方法を考えた | .55 | .25 |
| 6 相手に自分の意見を言うようにした | .51 | .07 |
| 11 何をしたらよいか友人に相談した | .40 | .06 |
| 状況把握 ($\alpha = .80$) | | |
| 9 状況を客観的に見ようとした | -.22 | .97 |
| 4 様々な面から問題を考えるようにした | .04 | .71 |
| 10 どこに問題があるのかを考えた | .26 | .54 |
| 5 自分の過去の経験を参考にした | .22 | .42 |
| 因子間相関 | | |
| | 1 | 2 |
| | 1 | -.62 |

注) 教示文：問題を解決するためにどのような行動をとっていましたか。

3 尺度とも“もっとも当てはまる数字に○をつけてください”と提示し、“全くとらなかった”から“よくとった”の 4 件法で回答を求めた。

教示文内の“1 ページで経験したと回答したような出来事”とは、高比良（1998）の尺度項目を指す。高比良（1998）の尺度に回答を求めることで過去 3 ヶ月内に経験した対人ストレスイベントを想起させ、その際に行使したコーピングを回答してもらった。

結果と考察

問題焦点型対処尺度 項目分析の結果、天井効果は見られず、4 項目で床効果が見られた。合計得点の上位 25% と下位 25% を対象とした G-P 分析（以下同様）の結果、全ての項目で有意差 ($p < .001$) が見られた。

床効果が見られた 4 項目を除外した 12 項目を対象に探索的因子分析 (Exploratory Factor Analysis：以下 EFA とする) を行った。初期解を最小 2 乗法によって求めた結果、固有値の減衰状況 (4.96, 1.29, .91, ...) から 2 因子構造が妥当であると判断し、再度 EFA (最小 2 乗法, promax 回転) を実施した (Table 1)。第 1 因子は問題や対象に対して積極的に働きかけて対処する項目を含むことから“積極的行動” ($\alpha = .82$)、第 2 因子は自分自身のおかれた状況を把握しようとする項目を含むことから“状況把握” ($\alpha = .80$) と命名した。EFA の結果を基に確認的因子分析 (Confirm-

Table 2
情動焦点型行動的対処尺度の EFA 結果
(最小 2 乗法, promax 回転)

| 質問項目 | 因子 | |
|----------------------------|------------|------------|
| | 1 | 2 |
| 回避型行動 ($\alpha=.69$) | | |
| 15 相手と距離をとるようにした | .68 | .07 |
| 11 一人になるようにした | .54 | -.21 |
| 1 相手と適度な距離を保とうとした | .52 | .11 |
| 9 何もなかったかのようにふるまうようにした | .52 | -.08 |
| 14 気持ちが落ち着くのを待った | .45 | .00 |
| 12 他のことで気を紛らわせようとした | .42 | .17 |
| 対人接近型行動 ($\alpha=.66$) | | |
| 13 周りの人に自分の気持ちを分かち合おうとした | -.08 | .79 |
| 10 話を聞いてもらって、気持ちを落ち着けようとした | -.10 | .71 |
| 16 友人と遊んで気を紛らわせようとした | .25 | .41 |
| 因子間相関 | | |
| | 1 | 2 |
| | 1 | -.42 |

注) 教示文：気を紛らわせるためにどのような行動をとっていましたか。

atory Factor Analysis：以下 CFA とする）を実施したところ、適合度指標は GFI=.91, AGFI=.87, CFI=.90, RMSEA=.09 であり、 $\omega=.88$ であった⁷。

情動焦点型行動的対処尺度 項目分析の結果、天井効果は見られず、5 項目で床効果が見られた。G-P 分析の結果は、全ての項目で有意差 ($p<.001$) が見られた。

床効果が見られた 5 項目を除外した 11 項目を対象に EFA を行い、固有値の減衰状況 (2.87, 1.49, 1.09, ...) から 2 因子構造が妥当であると判断し、再度 EFA を実施した。因子負荷量が .40 に満たない項目を削除して EFA を繰り返した結果、最終的に 9 項目が残った (Table 2)。第 1 因子は対象となる人や問題から距離をおく項目を含むことから、“回避型行動” ($\alpha=.69$)、第 2 因子は自分の感情を外に出して対処する項目を含むことから“対人接近型行動” ($\alpha=.66$) と命名した。EFA の結果を基に CFA を実施したところ、適合度指標は GFI=.90, AGFI=.83, CFI=.78, RMSEA=.13 であった。適合度指標の改善のため、修正指標を参考に 9 項目の中で文末に共通して“気を紛らわせようとした”が含まれる項目 12 と項目 16 の誤差分散間に共分散を仮定した (LM 検定: $\Delta\chi^2(1)=42.28, p<.05$)。その結果、適合度指標は GFI

Table 3
情動焦点型認知的対処尺度の EFA 結果 (最小 2 乗解)

| | 質問項目 | 最小 2 乗解 |
|----|----------------------------|---------|
| 13 | この体験は今後の役に立つ経験になる と思った | .67 |
| 4 | 今後はよいこともあるだろうと考える ようにした | .63 |
| 3 | 自分なら対処できると思うようにした | .61 |
| 15 | 今の状況を受け入れるようにした | .57 |
| 12 | 時間が解決してくれると思うようにした | .52 |
| 16 | 相手の良いところを探そうとした | .51 |
| 11 | 自分は自分、人は人と思うことにした | .50 |
| 6 | 早く解決すればいいのと思った | .49 |
| 5 | 他のことを考えるようにした | .46 |
| | 因子寄与率(%) | 38.35 |

注) 教示文：どのように考えるようにしていましたか。

=.92, AGFI=.86, CFI=.85, RMSEA=.10 であり、 $\omega=.70$ であった。

情動焦点型認知的対処尺度 項目分析の結果、天井効果は見られず、5 項目で床効果が確認された。G-P 分析の結果、全ての項目で有意差 ($p<.001$) が見られた。

床効果が見られた 5 項目を除外した 11 項目を対象に EFA を実施し、固有値の減衰状況 (3.45, .99, .83, ...) から 1 因子構造が妥当であると判断した (Table 3)。 α 係数は $\alpha=.80$ であった。EFA の結果を基に CFA を実施したところ、適合度指標は GFI=.95, AGFI=.92, CFI=.93, RMSEA=.07 であり、 $\omega=.80$ であった。

以上の結果から、情動焦点型行動的対処尺度では、許容できる α 係数が得られたが、CFA では十分な適合度指標は得られなかった。一方、残る 2 尺度では、 α 係数と適合度の両指標ともに十分な結果が得られた。従って、本尺度は妥当性のうち“構造的側面からの証拠”を限定的に支持する結果が確認されたと考えられる。情動焦点型行動的対処尺度の一部の項目でダブル・バーレルが疑われる項目が含まれているが、これらは完全なダブル・バーレルではないこと、調査対象者が項目内容を一義的に捉えるために必要であることから、尺度項目として採用した。

本研究はコーピング意図を考慮することで、従来の尺度よりも妥当性の高い尺度の開発を試みた。研究 1 では、下位尺度の一部で妥当性に関して必ずしも十分な結果が得られなかったが、尺度の構造は先行研究のコーピング分類と整合性をもつ。そこで、本尺度構造を暫定的に採択し、研究 2, 3 では尺度構造に関する検討を含めて、妥当性に関するさらなる検討を行う。

⁷ GFI, AGFI, CFI $\geq .90$, RMSEA $< .10$, α , $\omega \geq .60$ を妥当性の判断基準とした。

研究 2

目 的

尺度の妥当性に関する評価のうち、“一般化可能性の側面からの証拠”および“外的側面からの証拠”に関する検討を行う。

そのために第 1 に楽観性を取り上げる。楽観性は問題への直接的な対処、および肯定的再解釈との間に正の関連があることが示されている（川人・大塚, 2010; Nes & Segerstrom, 2006）。従って、楽観性が高い者はストレス反応を低減させるためのコーピングを選択する傾向が強くなり、問題解決のための直接的な対処や肯定的再解釈が選択されやすいと考えられる。本研究の情動焦点型認知的対処は、概念的には楽観性と類似するため、問題焦点型対処よりも楽観性と強い相関関係にあると考えられる。楽観性に関する尺度は、定評のある楽観主義尺度（The Life Orientation Test : LOT）を用いる。Scheier & Carver (1985) によって作成された尺度を中村（2000）が邦訳している。

第 2 に、コーピング資源としての Locus of Control を取り上げる。Locus of Control は、問題解決のための直接的な対処や肯定的再解釈との間に正の関連があることが示されている（加藤, 2001; 庄司・庄司, 1992）。また、対人関係の重要性を指摘する研究（Baumeister & Leary, 1995）をふまえると、対人ストレスイベントに対する対処可能性・内的統制が高い場合は問題解決のための直接的なコーピングを行使すると考えられ、Locus of Control は問題焦点型対処とより強い相関関係にあると考えられる。Locus of Control に関する尺度は、Rotter (1966) の I-E (Internal-External) 尺度の問題点を修正し、信頼性と妥当性が確認されている鎌原・樋口・清水 (1982) の尺度を用いる。

第 3 に、回避欲求を取り上げる。情動焦点型行動的対処尺度の下位因子である“対人接近型行動”は他者との関わりを積極的に行う対処、“回避型行動”はストレス源となる対象や他者から回避しようとする対処である。従って、対人関係に対する回避欲求との関連は、対人接近型行動との間に負の相関関係、回避型行動との間に正の相関関係があると考えられる。回避欲求に関する尺度は、渡部 (1999) の対人欲求尺度の下位尺度である回避尺度を用いる。この回避尺度は、他者との関係を回避する欲求の程度が測定できる尺度であり、信頼性と妥当性が確認されている。

以上より本研究での仮説は以下のように設定した。仮説 1 として、問題焦点型対処と情動焦点型認知的対処は楽観性と正の相関があり、その相関係数は情動焦点型認知的対処との値の方が、問題焦点型対処との値よりも有意に大きい。仮説 2 として、問題焦点型対処

と情動焦点型認知的対処は Locus of Control と正の相関があり、その相関係数は問題焦点型対処との値の方が、情動焦点型認知的対処との値よりも有意に大きい。仮説 3 として、情動焦点型行動的対処のうち“回避型行動”は回避欲求と正の相関があり、“対人接近型行動”は回避欲求と負の相関がある。

方 法

調査対象者と実施方法 2010 年 10 月中旬から 11 月中旬に石川県内の A 大学、東京都内の B, C 大学に在学する大学生計 182 名（男性 99 名、女性 83 名; $M=19.76$ 歳, $SD=1.67$ ）を対象に講義時間内に実施した。

質問紙の構成 1. フェイスシートには、学年・年齢・性別の記入を求めた。

2. Scheier & Carver (1985) によって作成され、中村 (2000) によって邦訳された楽観主義尺度（The Life Orientation Test : LOT）12 項目（5 件法）を使用した。

3. 鎌原他 (1982) によって作成された成人用一般的 Locus of Control 尺度 18 項目（4 件法）を使用した。

4. 渡部 (1999) によって作成された回避尺度 7 項目（5 件法）を使用した。

5. コーピング尺度は、研究 1 で最終的に決定した 3 下位尺度計 30 項目を使用した（4 件法）。3 下位尺度の教示文は、個人が日常的に行使するコーピングを測定できるようにした。例えば、問題焦点型対処尺度は、“あなたは人間関係のトラブルに対して、問題を解決するためにいつもどのような行動をとっていますか。もっとも当てはまる数字に○をつけてください。”と修正し、各尺度の項目の文末を現在形にした。

結果と考察

一般化可能性の側面からの証拠 3 下位尺度について、研究 1 と同様の因子構造を仮定して CFA を実施した（問題焦点型対処尺度：GFI = .87, AGFI = .80, CFI = .76, RMSEA = .11; 情動焦点型行動的対処尺度：GFI = .94, AGFI = .90, CFI = .91, RMSEA = .08 (LM 検定： $\Delta\chi^2(1)=18.29, p<.05$); 情動焦点型認知的対処尺度：GFI = .89, AGFI = .82, CFI = .62, RMSEA = .12)。その結果、本研究において妥当性評価のために設定した数値と比較すると、情動焦点型行動的対処尺度では尺度の構造に関する妥当性を支持する結果が得られたが、残る 2 尺度では基準とした数値が得られなかった。また、同様に信頼性に関して評価すると、問題焦点型対処尺度では良好な結果が（“積極的行動”： $\alpha=.70$, “状況把握”： $\alpha=.69, \omega=.78$ ）、残る 2 尺度では一部課題の残る結果が得られた（情動焦点型行動的対処尺度：“回避型行動” $\alpha=.53$, “対人接近型行動” $\alpha=.70, \omega=.58$; 情動焦点型認知的対処

Table 4
外的側面からの証拠に関する相関分析結果

| | 問題焦点型 対処 | 情動焦点型行動的対処 | | 情動焦点型 認知的対処 |
|---------------------|-------------|------------|-----------|----------------|
| | | 回避型行動 | 対人接近型行動 | |
| (研究 2) | | | | |
| 楽観主義尺度 | -.02 ns | -.28* | .17 ns | .36* |
| Locus of Control 尺度 | .55*** | -.42** | .29* | .40* |
| 回避尺度 | -.30*** | .61*** | -.10 ns | -.27* |
| (研究 3) | | | | |
| Locus of Control 尺度 | .49** | -.18 ns | .36** | .47** |
| 回避尺度 | -.41*** | .45*** | -.31* | -.32** |

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ 尺度： $\alpha = .58$, $\omega = .61$ 。

以上に示した 3 下位尺度に関する結果から、問題焦点型対処尺度と情動焦点型行動的対処尺度については“一般化可能性の側面からの証拠”を一部支持する結果が得られたが、情動焦点型認知的対処尺度では支持する結果を得ることができなかった。しかし、尺度を構成する下位因子の内容は、先行研究におけるコーピング分類と対応が見られ、尺度としての利用可能性と解釈可能性を有していると判断できる。

外的側面からの証拠 コーピング尺度 3 下位尺度と外的基準の尺度との相関係数を算出した (Table 4 上半分)。仮説 1 と仮説 2 の検証を行うため、構造方程式モデリングによる χ^2 値を利用した相関係数の差の検定を行った。その結果、情動焦点型認知的対処尺度と楽観主義尺度との相関係数 ($r = .36$) の方が問題焦点型対処尺度と楽観主義尺度との相関係数 ($r = -.02$) よりも有意に高かった ($\Delta\chi^2(1) = 4.43$, $p < .05$)。また、問題焦点型対処尺度と Locus of Control 尺度との相関係数 ($r = .55$) の方が情動焦点型認知的対処尺度との相関係数 ($r = .40$) よりも有意に高かった ($\Delta\chi^2(1) = 5.61$, $p < .05$)。

以上の結果から、仮説 1 は、情動焦点型認知的対処尺度の方が問題焦点型対処尺度よりも楽観主義尺度との間の相関係数が大きいという点は支持されたが、問題焦点型対処尺度と楽観主義尺度との間に有意な正の相関があるという点は支持されなかった。仮説 2 は、相関分析と相関係数の差の検定の結果から支持された。仮説 3 は、“回避型行動”と回避尺度との間に正の相関があるという点は支持されたが、“対人接近型行動”との間に負の相関があるという点は支持されなかった。

研究 3

目 的

研究 2 と同様の妥当性の検討を、研究 2 とは別のサ

ンプルデータを収集して実施する。本研究の仮説は、研究 2 における仮説 2 を仮説 1、研究 2 における仮説 3 を仮説 2 とする⁸。

方 法

調査対象者と実施方法 2010 年 11 月下旬に東京都内の D 大学に在学する大学生計 161 名 (男性 64 名、女性 97 名; $M = 20.22$ 歳, $SD = 1.28$) を対象にして講義時間を利用して実施した。

質問紙の構成 フェイスシート、成人用一般的 Locus of Control 尺度 (鎌原他, 1982)、回避尺度 (渡部, 1999)、コーピング尺度で構成し、研究 2 と同様のものを用いた。

結果と考察

一般化可能性の側面からの証拠 3 下位尺度について、研究 1 と同様の因子構造を仮定して CFA を実施した (問題焦点型対処尺度: $GFI = .87$, $AGFI = .80$, $CFI = .76$, $RMSEA = .11$; 情動焦点型行動的対処尺度: $GFI = .95$, $AGFI = .92$, $CFI = .91$, $RMSEA = .06$ (LM 検定: $\Delta\chi^2(1) = 13.94$, $p < .05$); 情動焦点型認知的対処尺度: $GFI = .90$, $AGFI = .83$, $CFI = .75$, $RMSEA = .11$)。その結果、妥当性評価の基準とした数値と比較すると、情動焦点型行動的対処尺度では尺度の構造に関する妥当性を支持する結果が得られたが、残る 2 尺度では妥当性評価のために設定した数値が得られず、課題の残る結果となった。信頼性に関して評価すると、問題焦点型対処尺度と情動焦点型認知的対処尺度では良好な結果が (“積極的行動”: $\alpha = .70$, “状況把握”: $\alpha = .66$, $\omega = .78$; $\alpha = .71$, $\omega = .72$)、残る 1 尺度では課題の残る結果が得られた (情動焦点型行動的対処尺度: “回避型行動” $\alpha = .58$, “対人接近型行

⁸ 本研究は追跡調査の 1 時点目の調査であり、調査対象者に対する総合的な負担を考慮して楽観主義尺度に対する回答を求めなかった。

動” $\alpha = .54$, $\omega = .53$)。

以上の結果から、研究 3 では研究 2 と同様に、“一般化可能性の側面からの証拠”に関する妥当性を限定的に支持する結果が得られた。

外的側面からの証拠 コーピング尺度 3 下位尺度と外的基準の尺度との相関係数を算出した (Table 4 下半分)。仮説 1 の検証を行うため、構造方程式モデリングによる χ^2 値を利用した相関係数の差の検定を行った。その結果、問題焦点型対処尺度と Locus of Control 尺度との相関係数 ($r = .49$) と情動焦点型認知的対処尺度と Locus of Control 尺度との相関係数 ($r = .47$) との間に有意差が見られなかった ($\Delta\chi^2(1) = 1.49$, *ns*)。

以上の結果から、仮説 1 は、問題焦点型対処尺度および情動焦点型認知的対処尺度と Locus of Control 尺度との間に正の相関関係があるという点について支持されたが、問題焦点型対処尺度と Locus of Control 尺度の相関係数の方が大きいという点については支持されなかった。仮説 2 は、相関分析の結果から支持された。

全体的考察

本研究は、行使意図を明確にしたコーピング尺度の開発と妥当性の検討を目的として一連の研究を行った。研究 1 では具体的な対人ストレスイベントに対するコーピングを、研究 2, 3 では普段の日常生活の中で行使するコーピングを測定するため、研究 1 と研究 2, 3 では教示文が異なった。研究 1 と研究 2, 3 の研究結果を比較すると、一部に相違は見られるが、全体を通して共通性が高いため、本尺度は具体的な対人ストレスイベントへのコーピングと特性的コーピングとともに測定できる尺度であると考えられる。

一連の研究から、問題焦点型対処尺度は信頼性については許容できる結果が得られたが、構造に関する妥当性の結果については必ずしも許容範囲の数値を示さなかった。これは、問題焦点型対処における“行動-認知”の次元の相互関係が強く、因子分析などの統計的分析では概念上の関係を安定して表すことが難しいのかもしれない。ただし、尺度の項目内容を考慮すると、本尺度は十分に解釈可能性を有した尺度であると考えられる。今後は、尺度項目の拡充を選択枝に含め、項目の相互関連の検討を詳細に行っていく必要がある。

情動焦点型行動的対処尺度は、研究 2, 3 において尺度の構造に関する妥当性を支持する結果が得られており、一般化可能性を支持する結果が得られたと考えられる。これに対して信頼性は、研究 2, 3 ともに α 係数が許容範囲の数値を示さなかった。しかし、本研究では十分な項目作成プロセスを経ており (“内容的側面からの証拠”の確保)、構造方程式モデリングを

用いて外的基準との相関係数を算出した (相関係数の希薄化の修正) ため、信頼性の低さが外的基準との相関に及ぼした影響は小さいと考えられる。 α 係数が低かった理由には項目数の少なさが考えられ、今後は項目の拡充を行うことで、尺度の汎用性を高める必要がある。

情動焦点型認知的対処尺度は、信頼性について安定した結果が得られた一方で、全体の調査を通して尺度構造について検討の必要性を示唆する結果が得られ、一般化可能性を十分に支持する結果は得られなかった。本尺度は、研究 1 で 1 因子構造が得られたため、その後の研究でも 1 因子構造を仮定したが、研究 2, 3 では 2 因子構造の可能性を示唆する結果も得られている。今後、項目を拡充した上で、2 因子構造に関する検討を行うことによって、尺度の解釈可能性をさらに高めていく必要がある。

コーピング尺度と外的基準との関係の検討 (研究 2, 3) において、有意な相関が得られた結果については先行研究と同程度の関連が示された。一方、一部の仮説では仮説を支持する結果が得られなかった。その理由には、コーピング行使意図以外の要因の統制が十分でなかったことが考えられる。具体的には、回答者が想起する対人ストレスイベントが異なる、対人ストレスイベントの対処困難性の程度が異なるなどが挙げられる。この点に関しては、回答者に想起させる対人ストレスイベントを特定する、または対人ストレスイベントへの認知的評価による影響を統制した相関分析の実施などで対処が可能であると考えられる。

本研究で作成した対人ストレス・コーピング尺度は、行使意図ごとに異なる教示文を提示することで対人ストレス・コーピングの意図を明確にした測定を行う尺度である。尺度作成にあたっては、既存尺度の項目を項目プールとして十分なステップを経て検討し、行使意図を考慮した教示文を用意した。これにより、本研究の目的を満たす尺度構成ができたと考えられる。また、研究 1—3 では、各尺度が先行研究によるコーピング分類に準じた下位構造に概ね分けることができた。さらに、本研究の検討から、妥当性のうち 4 側面について限定的ではあるが支持する結果が得られた。

以上より、本研究の目的は一定程度達成されたと考えられる。個人の行使意図を正確に測定することは、個人のコーピングの正確なアセスメントを可能にし、臨床的介入を行う際にも有益な情報を提供しうる。また、コーピングの行使意図の背景やその効果を明らかにする際にも、本尺度の測定結果は重要な意味をもつと考えられる。

しかし、本研究では必ずしも十分な妥当性が確認されたわけではない。妥当性の確認は断続的に行われる過程であり科学的探究行為である (Messick, 1989 池

田沢 1992) ことから、さらなる検討が必要である。

引用文献

- Aldwin, C. M. (2007). *Stress, coping, and development: An integrative perspective*. 2nd ed. New York: Guilford Press.
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497-529.
- Carver, C. S., Scheier, M. F., & Weintraub, J. K. (1989). Assessing coping strategies: A theoretically based approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 267-283.
- 平井 洋子 (2006). 測定の妥当性からみた尺度構成——得点の解釈を保証できますか—— 吉田 寿夫 (編著) 心理学研究法の新しいかたち 誠信書房 pp. 21-49. (Hirai, Y.)
- 鎌原 雅彦・樋口 一辰・清水 直治 (1982). Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, **30**(4), 38-43. (Kambara, M., Higuchi, K., & Shimizu, N.)
- 神村 栄一・海老原 由香・佐藤 健二・戸ヶ崎 泰子・坂野 雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, **33**, 41-47. (Kamimura, E., Ebihara, Y., Sato, K., Togasaki, Y., & Sakano, Y. (1995). Validation of three-dimensional model of coping response and the development of the Tri-axial Coping Scale (TAC-24). *Bulletin of Counseling and School Psychology*, **33**, 41-47.)
- 神田 信彦・大木 桃代 (1998). 中学生のストレス対処——統制感と感情的反応の機能—— 健康心理学研究, **11**, 39-47. (Kanda, N., & Ohki, M. (1998). Stress coping in junior high school students: A function of general perceived control and affective response. *Japanese Journal of Health Psychology*, **11**, 39-47.)
- 加藤 司 (2000). 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究, **48**, 225-234. (Kato, T. (2000). Construction of the Interpersonal Stress-Coping Inventory for undergraduates. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **48**, 225-234.)
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, **49**, 295-304. (Kato, T. (2001). Interpersonal stress. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 295-304.)
- 川人 潤子・大塚 泰正 (2010). 教育実習を控えた大学生の楽観性が直接的またはストレッサー、コーピングを介して間接的に抑うつに与える影響——共分散構造分析による因果モデルの検討—— 学校メンタルヘルス, **13**, 9-18. (Kawahito, J., & Otsuka, Y. (2010). Acute and intermediate effects of optimism on depression for university students before practice teaching: Structural equation modeling. *Journal of School Mental Health*, **13**, 9-18.)
- 木島 恒一 (2008). ストレス・コーピング・スキル尺度の作成——その信頼性・妥当性の検討—— 心身医学, **48**, 731-740. (Kijima, T. (2008). Measurement of stress coping skills: Reliability and validity of the Stress Coping Skill Scales. *Japanese Journal of Psychosomatic Medicine*, **48**, 731-740.)
- 小杉 正太郎 (2000). ストレススケールの一斉実施による職場メンタルヘルス活動の実際——心理的アプローチによる職場メンタルヘルス活動—— 産業ストレス研究, **7**, 141-150. (Kosugi, S. (2000). Mental health activities in the workplace by a general checkup the Job Stress Scale. *Job Stress Research*, **7**, 141-150.)
- Latack, J. C., & Havlovic, S. J. (1992). Coping with job stress: A conceptual evaluation framework for coping measures. *Journal of Organizational Behavior*, **13**, 479-508.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company. (ラザルス, R. S.・フォルクマン, S. 本明 寛・春木 豊・織田 正美 (監訳) (1991). ストレスの心理学——認知的評価と対処の研究—— 実務教育出版)
- Messick, S. (1989). Validity. In R. L. Linn (Ed.), *Educational measurement*. 3rd ed. New York: McMillan. pp. 13-103. (メシック, S. 池田 央 (訳) 妥当性 リン, R. L. (編) 池田 央・藤田 恵璽・柳井 晴夫・繁樹 算男 (監訳) (1992). 教育測定学 学習評価研究所 pp. 19-145.)
- Messick, S. (1995). Validity of psychological assessment validation of inferences from person's responses and performance as scientific inquiry into score meaning. *American Psychologist*, **50**, 741-749.
- 村山 航・及川 恵 (2005). 回避的な自己制御方略は本当に非適応的なのか 教育心理学研究, **53**, 273-286. (Murayama, K., & Oikawa, M. (2005). Are avoidance strategies always maladaptive? *Japanese Journal of Educational Psychology*, **53**, 273-286.)
- 中村 陽吉 (編著) (2000). 対人場面における心理的個人差——測定の対象についての分類を中心にして—— プレーン出版 (Nakamura, H.)
- Nes, L. S., & Segerstrom, S. C. (2006). Dispositional optimism and coping: A meta analytic review. *Personality and Social Psychology Review*, **10**, 235-251.
- 大塚 泰正 (2008). 理論的作成方法によるコーピング尺度——COPE—— 広島大学心理学研究, **8**, 121-128. (Otsuka, Y. (2008). The COPE inventory: A

- theoretically based coping questionnaire. *Hiroshima Psychological Research*, **8**, 121-128.)
- 尾関 友佳子 (1990). 大学生のストレス自己評価尺度——質問紙構成と質問紙短縮について—— 久留米大学大学院紀要比較文化研究, **1**, 9-32. (Ozeki, Y.)
- 尾関 友佳子 (1993). 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂——トランスアクショナルな分析に向けて—— 久留米大学大学院比較文化研究科年報, **1**, 95-114. (Ozeki, Y.)
- Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monograph*, **80**, 1-28.
- Scheier, M. F., & Carver, C. S. (1985). Optimism, coping, and health. *Health Psychology*, **4**, 219-247.
- Seiffge-Krenke, I., & Shulman, S. (1993). Stress, coping and relationships in adolescence. In S. Jackson & H. Rodriguez-Tome (Eds.), *Adolescence and its social worlds*. Hove: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 169-196.
- 島津 明人 (2002). 心理学的ストレスモデルに関連する諸要因 小杉 正太郎 (編著) ストレス心理学——個人差のプロセスとコーピング—— 川島書店 pp. 31-58. (Shimazu, A.)
- 島津 明人・小杉 正太郎 (1998). 従業員を対象としたストレス調査票作成の試み(2)コーピング尺度の作成 早稲田心理学年報, **30**, 19-28. (Shimazu, A., & Kosugi, S. (1998). The development of stress inventory for workers (2) With reference to coping scale. *Waseda Psychological Report*, **30**, 19-28.)
- 庄司 正実・庄司 一子 (1992). 職場用コーピング尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 産業医学, **34**, 10-17. (Shoji, M., & Shoji, K. (1992). Development of a scale for workers' coping behavior: Its reliability and validity. *Japanese Journal of Industrial Health*, **34**, 10-17.)
- 高比良 美詠子 (1998). 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, **14**, 12-24. (Takahira, M. (1998). Construction of a scale of life events in interpersonal and achievement domains for undergraduate students. *Japanese Journal of Social Psychology*, **14**, 12-24.)
- 渡部 玲二郎 (1999). 対人関係能力と対人欲求の関係 心理学研究, **70**, 154-159. (Watanabe, R. (1999). The relationship between abilities in interpersonal relations and interpersonal motivations. *Japanese Journal of Psychology*, **70**, 154-159.)

—— 2011. 3. 15 受稿, 2012. 1. 21 受理 ——